

フッサールにおける構造現象学の展開

—— ロシア・東欧からパリへ ——

野 家 伸 也

1 現象学 vs. 構造主義？

現象学と構造主義の関係については、両者の間の断絶や対立を強調する見方が今日でも依然として根強いようである。いったい構造主義が反現象学を標榜するものであるというような印象が一般に支配的となってしまうのはなぜであろうか。その最大の要因は、第二次世界大戦直後のフランスにおいて実存主義が、その代表者であるサルトルにおいて典型的に見られるように、フッサールの現象学（サルトルの場合には特に『イデーネ』第一巻）と深く結びついて生まれたこと、そして、一九六〇年代に構造主義が実存主義に代わる新しい流行思想として爆発的風潮を巻き起こしたときに、その機縁をつくったレヴィ・ストロースの『野生の思考』（一九六二）の最終章「歴史と弁証法」において辛辣なサルトル批判が展開されていたことである。それはフランスの知的世界における覇権の交代を強く印象づける出来事であった。

フッサールにおける構造現象学の展開

「歴史と弁証法」という論文は直接的にはサルトルの『弁証法的理性批判』（一九六〇）における反人類学的な言説に対する反論として書かれたものである。レヴィ・ストロースが問題にしたのは、歴史に客観的な発展法則があるとしたり、歴史に「自由の意識の進歩」といった究極の目標があるとするような、西欧近代に生まれた歴史意識、そして歴史の連続性によって、他の社会の発展段階を低い段階に位置づけ、特に「未開」民族を歴史の主体としての人間から排除し、「發育不全で畸形」（サルトルの言葉^①）の人類とみなすような西欧近代の他者認識であった。

このように「歴史と弁証法」という論文は、サルトル批判というよりは、サルトルに代表されるような西欧近代の特殊な歴史意識（レヴィ・ストロースから見れば普遍化できない歴史意識）の批判をテーマとしたものであった。ここではその批判の詳細には立ち入らないが、いずれにしても、構造主義の立場からの現象学的方法の批判というようなことはテーマとなっていなかったのである。しかしそれにもかかわらず、構造主義者レヴィ・ストロースが現象学的方法に依拠するサルトルを批判したということで、この論文は「構造」という概念によって主体の意識を消去することに成功した構造主義が現象学に突きつけた挑戦状^②であるかのような印象を生み出してしまい、その後の現象学と構造主義の関係をめぐる議論に一定の方向性を与えることになったのである。

そうした方向性で行なわれた議論の中で最も著名なものはポール・リクールの論文「構造と解釈学」（一九六三）である。リクールはこの論文で、レヴィ・ストロースの構造主義を西欧の哲学的伝統に対する大胆極まりない挑戦と見て（その認識自体は正しいのであるが）、自らが拠って立つ現象学的・解釈学的伝統をその挑戦から断固として守ろうとしたのである。

リクールの構造主義批判を有名にしたのは「超越論的主体なきカント主義」という評語である。リクールによれば、レヴィ・ストロースは言語や社会といった人間的事象に関してその無意識的な下部構造をあばいて、その深層の構造の上に表層的現象が成立してくるさまを観察するという考察態度を取っている。その際の「無意識的なもの」とは「カテゴリー的・結合的な」無意識的操作、いわば「カント的な無意識的なもの」である。^②ところでカントにおいては、時間と空間という感性的直観の純粹形式を通して受け取られた直観の多様が、悟性の自発性によって、十二の純粹悟性概念すなわちカテゴリーのもとに総合統一されるのであるが、このような総合統一の役割を果たし、経験の世界を成立せしめる最も根源的な働きを行なうものとして超越論的な「自我」という主体が考えられていた。しかるにリクールによれば、構造主義的立場においては、この「自我」が消去され、主体ぬきで、無意識的に、さまざまなカテゴリーが結び合う体系しか考えられていない。^③こうして構造主義は哲学としては「反現象学的な知性主義」を標榜することになるという。なおリクールは「無意識的なもの」を、観察者から独立した、まったく客観的なものと考えて「自然」そのものと同一視しているので、レヴィ・ストロースはすべての人間的事象を「自然」に還元しようとする自然主義者だということになる。^④

このリクールの論文は極めて大きな影響力を持つことになり、それ以後の現象学と構造主義の関係をめぐる議論に強力な枠組みを与えた。たとえば市倉宏祐氏は（おそらくリクールの論文に触発されてであろうが）次のように述べている。「現象学が主体の体験意識を根拠としていたのに対して、構造主義がこれと全く異なる立場に立っていることは明らかである。一方がどこまでも個々の主体を根底に据えているのに対して、他方はむしろこれらの主体を全体的に組織する形式的構造を根源と考える。一方があくまでも意識的な体験

に執着するのに対して、他方はむしろ無意識のうちに働く客観的法則を求める。一方が主体の意識に根拠をおく超越論的哲学であるとすれば、他方は構造の客観的様式を解明せんとする構造科学である」^⑤

ともあれ、こうした対比に典型的に見られるように、これまで現象学と構造主義とは互いに両立不可能な二つの立場として示されるのが常であった。しかしもし構造主義が現象学と断絶しているとするならば、それは一九六〇年代のバリにおいてミシェル・フーコー、ロラン・バルト、ジャック・ラカンなどによって引き起こされた流行思想としての、いわばイデオロギー的側面においてであって（その文脈では、現象学は西欧近代の悪しき伝統を継承する哲学として批判されることになる）、学問の方法論としての側面においてではない。構造主義の方法論としての側面と、「反ヒューマニズム」「人間の消滅」「主体の不在」といった挑戦的でセンセーショナルなスローガンで語られる流行思想としての側面（それはそれで、西欧近代的な人間観に揺さぶりをかけるといって、いわばショック療法的な役割を果たしたわけであり、レヴィ・ストロースもそうした揺さぶりに加担しなかったわけではないのであるが）とは厳に区別されなければならない。真に「構造主義革命」の名にふさわしい方法論の革新は流行思想の興亡という出来事とは無縁なところで生じていたのであって、その現場においては、現象学と構造主義の間には断絶どころか、むしろいくつかの注目すべき歴史的な接触さえ見られたのである。このことは特に現象学の発端と構造主義のロシア・東欧における展開との連関に目を向けるときに明らかにになる。そこでわれわれはまず、フッサールの初期の思想が同時代のロシア・東欧においてどのように受容されていたのかということを確認することから始めたいと思う。

2 ロシア・東欧における現象学の受容

フッサールが生前に公刊した諸著作を、それらが同時代の知的世界にどのような影響を与えたかという観点から比較検討してみると、ロシア・東欧に関しては、『論理学研究』（初版一九〇〇・〇一）——特に「現象学と認識論のための諸研究」と題された第二巻——が、『イデーネ』第一巻（一九一三）をはじめとする他の諸著作がほとんど問題にならないほどの強い影響力をもっていたことにまず驚かされる。しかもそればかりではなく、フッサールの現象学の受容のあり方そのものが、西欧諸国とは際立った対照を示しているように思われるのである。

一般にフッサールの現象学は、同時代の西欧諸国においては、フランスにおけるように実存主義と結びつくにせよ、あるいは英国におけるように言語分析の立場から悪しき形而上学として斥けられるにせよ、ともかくすでに確立された新しい哲学や「主義」として受け止められ、『イデーネ』第一巻はその体系を叙述した著作だとみなされた。これに対してロシア・東欧においては、現象学が既成の哲学や「主義」として論じられることが少なかった代わりに、フッサールの着想が、近年構造主義の先駆として再評価されているロシア・フォルマリズムの文学理論や、それと密接な関係にあるプラハ言語学派の構造主義的言語学の個別的な研究の中でまさに「方法」として生かされ、その有効性を発揮していたのである。

たとえばクリステイーナ・ポモルスカは『ロシア・フォルマリズムの理論とその詩的環境』（一九六八）において、ロシア・フォルマリストたちが展開した文学理論の基本的源泉として「人文科学の一般方法論」「近代言語学の方法論」「近代藝術の理論と実践」の三点に並ぶものとして「フッサールの現象学的哲学」を

挙げている。さらに代表的な構造言語学者であるロマーン・ヤコブソンは、ソシュールの『一般言語学講義』（初版一九二六）と並んで、若い頃に読んだ『論理学研究』第二巻が自分の研究を導いてくれたということ折りにふれて語っている。ヤコブソンのフッサールに対する傾倒が並大抵のものでなかったことは、次のような回想に示されている。

「形態と意味をめぐる言語の根本問題は、私をますます苦しめていたが、一九一五年〜一六年、私がモスクワ大学の第二学年に在学していたとき、フッサールの『論理学研究』第二巻が、この問題を把握する道を次第に照らし出してくれた。私はこの巻を手に入れるために、戦時中の禁に背いて、秘かにオランダ経由で注文しなければならなかった。この書物は、その後私のすべての世界遍歴と行をともした上、いまなお、昔ながらのその古い黄色の一つ折判が、表現とその意味の問題、ならびに全体と部分の理論、またとりわけ純粹文法の理念を扱っていつも生氣に溢れ、言語研究者には欠くことのできない諸論文によって、終始かわらずに私の役に立っている」⁽⁶⁾

このようにロシア・東欧の知的世界においてフッサールの現象学が重大な影響を与えたことは公然の事実であるにもかかわらず、これまで現象学者の間では、このことについての認識が著しく不足していたように思われる。たとえばヒューバート・シュピーゲルバークの『現象学運動』（初版一九六五）は、知的運動としての現象学の歴史に関する現在までのところ最も包括的な著述であるが、この七〇〇ページを超える大冊でさえ、ロシア・東欧における現象学の展開に触れている箇所は僅か二ページ足らずであり、しかも、そこにはロシア・フォルマリズムや構造言語学への言及がまったく見られないのである（一九八四年に大幅な増補改訂を施した第三版が公刊されたが、この点に関してはまったく事情は変わっていない）。

本稿はこうした認識の欠落を補おうとするものであるが、その意図は単に歴史的興味を満足させることにあるのではない。むしろわれわれは、ロシア・フォルマリズムや構造言語学の理論とフッサールの現象学との内的関係を探ることによって、そこから現象学の継承のあるべき姿についての示唆を読み取ってほしいと思うのである。

3 ロシア・東欧における現象学の展開

まず最初にロシア・東欧における現象学の展開の歴史を簡単に振り返ってみることにしよう。ロシアにおけるフッサールの受容は驚くほど早い時期に始まっており、すでに一九一二年には『論理学研究』初版のロシア語訳が出版されている（ただし「純粹論理学序説」と題された第一巻のみ）。またロシア革命以前にドイツに留学していたロシアの哲学者たちで、フッサールの下で学んだ者も多く、その中には後にフランスへ渡ったジョルジュ・ギユルヴィチやアレクサンドル・コイレもいたが、ロシアにフッサールを紹介する上で最も大きな役割を果たしたのはグスタフ・シベットである。シベットはヤーコブソンがモスクワ大学に入学した頃にはすでに帰国しており、一九一五年にヤーコブソンをリーダーとする若い学生たちがモスクワ言語学サークルを結成し、詩的言語の研究を発展させたときに、他の多くの哲学者や言語学者や詩人たちとともにこのサークルに参加した。このことがヤーコブソンとフッサールの最初の出会いをもたらしたのである。また一九一七年にシベットは『論理学研究』と並ぶ普遍的な言語研究の一つとして、フランツ・布伦ターノの高弟アントン・マルティの記述的言語哲学をヤーコブソンに紹介している。一九二〇年にヤーコブソン

がチェコスロヴァキアに移住したあとのモスクワ言語学サークルにおいてシペットが果たした役割についてはヤーコブソンの次のような証言がある。

「二〇年代初めのモスクワ言語学サークルにおいては、『論理学研究』の言語学への適用と、とりわけ普遍文法の理念へ公然と回帰するというエドムント・フッサールとアントン・マルティの示唆に富む考えについて活発な議論が続けられた。この議論を指導したのは、フッサールがその最もすぐれた弟子の一人とみなしていた言語哲学者のグスクフ・シペット（一八七八・一九四〇）である」^⑦

周知のようにこのモスクワ言語学サークルは、やがてロシア・フォルマリズムという名で文学理論の歴史に登場してくることになる。フォルマリストたちは言語学に基礎を置いた文学理論を提唱したのであるが、そのさい彼らが理論的な拠りどころとしたのは『論理学研究』第二巻における表現論なのである。

一方チェコスロヴァキアに移住したヤーコブソンは、今度はプラハ言語学派の設立に尽力することになった。構造言語学の音韻論を創始したことで知られるこのサークルの会長となったヴィレーム・マテジウスは、プラハのドイツ系大学で、二人のブレンターノの弟子から教えを受けていたという。一人はマルティであり、もう一人は、フッサールの同郷（モラヴィア地方）の友人で、後に一九一八年に成立したチェコスロヴァキア共和国の初代大統領を十七年の長きにわたって務め、プラハ言語学派の最も有力な後援者でもあったトマス・マサリクである。^⑧

「T・G・マサリク（一九五〇・一九三七）とマルティは、その友人フッサールと同じくF・ブレンターノ（一八三八・一九一七）の下で薫陶を受けていたが、彼らはその聴講生ヴィレーム・マテジウスに良い影響を及ぼした。マテジウスは後にプラハ言語学サークルを創始することになるが、そこではフッサー

ルの思想と彼の一九三五年一月一八日の記念すべき講演——「言語の現象学」——が大きな反響を呼び起こしたのである^⑨」

ヤーコブソンは会長のマテジウスをプラハ言語学派の創始者と呼んでいるが、副会長を勤めたヤーコブソンこそが実質的な創始者であり、一九三九年にナチスの侵攻にあってチェコスロヴァキアを去るまでの間、同サークルをリードした中心人物であったことは周知の通りである。一九三五年のフッサールの講演もヤーコブソンの招きによって実現したものである。

ヤーコブソンは、現代言語学の趨勢を展望して、「言語学は多種多様な言語および言語族をありのままに研究することから、体系的な類型学的研究と漸進的統合を経て、完全に普遍的な言語科学になりつつある」と述べ、そのような普遍的な言語研究の分野における哲学的貢献として「フッサールやマルティの現象学的思索」を挙げている。^⑩ ヤーコブソンの言うところによれば「今世紀の初め、フッサールが『論理学研究』第二巻、特に『独立の意味と非独立の意味の相違ならびに純粹文法理念』を扱った章で展開した思想は、当時支配的であった『もっぱら経験主義的な』文法に対して『アプリオリな一般文法理念』を対置させることによって、構造言語学の登場をうながす強力な要因となった」のである。^⑪

4 二つの現象学的潮流

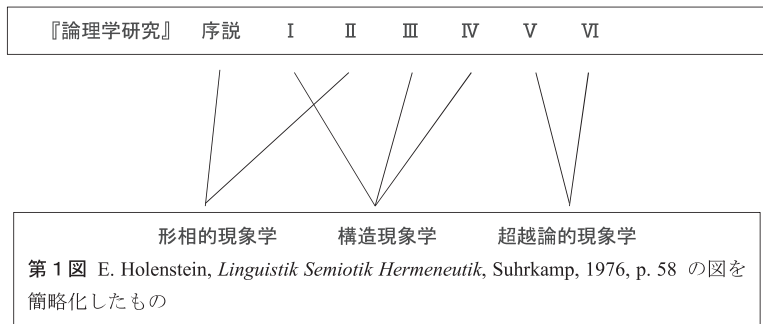
このようにしてモスクワにおいてはシペット、プラハにおいてはヤーコブソンがそれぞれ仲介者となって、フッサールの現象学はロシア・フォルマリズムの文学理論や構造言語学の成立に大きな影響を与えたのである

フッサールにおける構造現象学の展開

る。ただし注意しなければならないのは、ここで言われる「フッサールの現象学」とは超越論的現象学のことではない、ということである。『論理学研究』において成立した現象学は超越論的現象学だけではない。エルマー・ホーレンシュタインによれば、『論理学研究』は三つの際立った現象学的潮流の出発点と見ることができ、三つの著しく異なった部分の各々がその出発点となっているのである（第1図参照）。

第一の流れは形相的現象学（Eidische Phänomenologie）である。その担い手はミュンヘン大学のテオドル・リップス門下の若き俊才たちを中心とするミュンヘンゲッティンゲン現象学派（以下、ミュンヘン現象学派と略記）で、彼らが依拠した部分は『論理学研究』の第一巻と第二巻の第二研究（「スペチエスのイデア的単一性と近代の抽象理論」）である。ミュンヘン現象学派は『論理学研究』の持つ三つの側面にとりわけ熱狂した。すなわち心理主義に対する徹底した批判、本質一般性（形相）の自体的存在の主張、そして本質一般性をとらえる方法としての本質直観の重視である。

ミュンヘン現象学派は特に倫理学と美学の分野においてすぐれた成果を生み出した。そのうちの最大のものマックス・シェラーの『倫理学における形式主義と実質的価値倫理学』（第一部一九一三、第二部一九一六）



である。しかし一九一四年、若手グループのリーダー格だったルドルフ・ライナハが第一次世界大戦に出征して戦死したことで学派は解体し、さらに一九一六年にフッサールがフライブルク大学に招聘されるに及んで学派の命運は尽きてしまった。なお余談ながら、ミュンヘン現象学派を最初に日本に紹介したのは、東北帝国大学の美学の教授だった阿部次郎である。阿部が若き日に上梓した『倫理学の根本問題』（一九一六）と『美学』（一九一七）は、ミュンヘン現象学派の師匠格だったリップスの倫理学と美学を祖述したもので、これはおそらく日本で最も早い現象学（超越論的現象学ではなくて形相的現象学であるが）の紹介だったと思われる。

第二の流れは構造現象学（Strukturele Phänomenologie）である。その担い手はロシア・東欧の構造言語学者たちで、彼らが重視した部分は第一研究（「表現と意味」、第三研究（「全体と部分に関する理論について」）、そして第四研究（「独立の意味と非独立の意味の相違ならびに純粹文法の理念」）である。ロシア・東欧の構造言語学者たちが特に注目したのは〈不変体〉（インヴァリアント）の持つ形相的性格、その「直観への所与」というよりは〈構造〉としての性格（後述）であった。特に第三研究における全体／部分関係についての理論はヤーコブソンの構造言語学において〈構造〉概念の成立を促し、さらにヤーコブソンを介してレヴィー・ストロースの構造人類学の成立にも機縁を与えた。第三研究は、ロシア・東欧に始まりパリに受け継がれた構造主義的思考の源泉となったのである。

第三の流れである超越論的現象学（Transzendente Phänomenologie）は、第五研究（「志向的体験とその《内容》」）と第六研究（「認識の現象学的解明の諸要素」）における「超越論的転回」すなわち意識の志向的構造へのラディカルな諸洞察の成果である。超越論的現象学の主要な関心事は主観と客観の内在的相関関

係で、この超越論的な現象学運動の担い手は、フッサール自身を含むフライブルク現象学派である。

このうちの第一の流れと第二の流れは、いわば独立した生命体となつて、フッサールの手を離れて（勝手に？）自己展開していったのであるが、フッサール自身は第五、第六研究で確立した超越論的現象学こそが唯一の正統的な現象学であると思ひ定めるに至つた。そしてその立場から『論理学研究』全体を眺めてみると、そこに余りの不統一があることに愕然とし、全体を改訂する必要を痛感した。しかしすぐに改訂作業に取り掛かつたわけではなく、まずは超越論的現象学の体系を叙述する著作の起草を優先させた。そして『イデーン』第一巻を起草したあとに『論理学研究』の改訂に着手したのである。

フッサールは『論理学研究』第二版の序言で『論理学研究』が再版されることになり、しかも出来るだけ『イデーン』の立場に適合させて、読者を実際の現象学的、認識論的研究方式へ導入するのに役立つような形に改訂して出すことになつた」と述べている。つまり超越論的現象学の立場から『論理学研究』全体を統一しようと試みたのである。これはフッサール自身にとってはどうしても必要な改訂であつたが、この（余計な？）改訂によって、もともと超越論的現象学とは異質な形相的現象学や構造現象学に超越論的現象学が（無理やり？）接ぎ木されることになつて、『論理学研究』のテキストは極めて解りにくいものになつてしまつた。そして何よりも問題なのは、形相的現象学や構造現象学の独自性が曖昧なものになつたために、『論理学研究』第二版から、初版が持っていたような歴史的インパクトが失われてしまつたことである。したがって『論理学研究』が持ち得た歴史的機能を明らかにするために、

- （1） 三つの現象学的潮流を互いに独立したものとして扱うこと
- （2） テキストを初版の状態に戻して読むこと

が必要となる。

5 ヤーコブソンにおける〈構造〉

ここでは『論理学研究』が持ち得た歴史的機能の一つとして、構造言語学の基礎づけと発展において持ち得た機能を少し詳しく見てみることにしよう。取り上げるテキストは、ヤーコブソンが亡命の途上、スウェーデンに滞在してコペンハーゲン学派と交流していた時期に発表した論文「幼児言語、失語症および一般音法則」(一九四一年発表。邦訳は服部四郎編・監訳『失語症と言語学』岩波書店、一九七六に所収)である。ヤーコブソンはこの論文の冒頭の題辞「真に統一するものはすべて〈基づけ〉(Fundierung)の関連である」を『論理学研究』第三研究から採っている。このことが示すように、この論文はヤーコブソンの膨大な業績の中でもフッサールの影響が最も顕著に顕われているものの一つである。

ヤーコブソンはこの論文で、幼児が音素体系を獲得していく過程と、失語症の患者が音素体系を喪失していく過程を比較しようと企てる。ヤーコブソンによれば、この音素体系は極めて厳密な一つの全体をなし、それは極めて強い必然的な結びつきを備えたものであって、その獲得と消失の順序は、まったく選択の余地のない〈不変〉なものである。そして彼はこの体系の〈自律性〉を強調する。その構造は堅固で、その規則はこの構造そのものだけに関わり、その構造の外にある生理学的諸条件に依存することはあり得ない(構造分析における〈内在性〉の原則)。この点で、生理学者たちが「エネルギー最小消費の原則」などを引き合いに出して試みるような自然主義的な解釈は斥けられるのである。

ここでロシア・フォルマリズムの文学理論について触れておくと、フォルマリズムとは、一九一五年から一九三〇年にかけてロシアに擡頭した文藝批評の潮流を指す語であるが（この語は批判者たちによって輕蔑的なニュアンスを込めて使われていた）、フォルマリストたちは何よりも文学作品そのものを考察の中心に据えるべきだと主張し、当時のロシアの文藝批評において支配的だった心理学的、社会学的アプローチ（いわば文藝批評における自然主義）を拒否した。彼らによれば、作家の伝記的事実や「思想」の解明、同時代の社会生活の分析などから作品を説明することはできない。フォルマリストたちが重要視したのは、シクロフスキーの論文の題名に要約されている、「技法としての藝術」という考え方である。〈技法〉とは文学作品を文学作品たらしめる「文学性」、文学の内在的法則のことで、彼らは創造という行為と作品そのものを覆い隠すことにしなければならない一切の〈外〉からのアプローチを排して、作家が己の個性的言表を文学として表出する際に使用する〈技法〉に注意を集中させるのである。こうしたフォルマリストたちの姿勢は、言語という研究対象を言語以外の事象と関連づけて説明することを拒否し、言語を言語たらしめる、言語の内在的法則を探究しようとするヤーコブソンの姿勢と共通している。ロシア・フォルマリズムの文学理論がプラハ言語学派の構造言語学の源流とされる所以である。

さて、話をヤーコブソンの論文に戻すと、音素体系は、すべての言語体系に共通の普遍的体系（話し始めた幼児には、まずこれが現れてくる）と、それぞれの言語体系に特有の体系——これがすべての言語体系を他から区別するのであり、幼児は先の普遍的な体系を獲得したあと、この体系のうちでおのれを特殊化する——とから構成されている。

音素の継起的な発生の順序は厳密に決っていて不変だとされる。その順序を、ほんの一部分だけであるが、

ヤーコブソンの記述をもとに示すと、次のようになる。

——硬口蓋音は歯音のあとに現れる

——最初の母音は [a]

——その後子音対立が生じる

1 [p] - [m] 口腔音と鼻音の対立

2 [p] - [t] 唇音と歯音の対立

3 [m] - [n] 唇音と歯音の対立

すべての幼児言語はこの最小限子音体系から出発する。音素の発生のこの順序は不可逆的で、失語症の患者において音素が消失していく順序は正確にこの逆になる。このように、すべての音素には「基づける」音素と「基づけられる」音素との区別がある。後者が前者より先に現れることはないし、前者が消失すれば必ず後者も消失する。こうした「基づけるもの」と「基づけられるもの」との関連によって統一された全体こそが〈構造〉である。ホーレンシュタインによれば、ヤーコブソンは『論理学研究』第三研究における全体／部分関係に関する理論について、これが構造的統一体に働く一般法則の最初の体系的定式化であり、「構造主義の基礎理論」であるとみなしていたそうである⁽¹²⁾。

構造体に働く一般法則とは、たとえば構造体の構成要素 a、b に関して、「a が存在するならば b も存在する」「a が存在しないならば b も存在しない」といったことが成り立つことである。フッサールは「基づけるもの」と「基づけられるもの」との関連を具現化する例として「延長」と「色」の関連などを挙げているが、そこから〈構造〉概念に到達するのはやはり難しかったようである。ヤーコブソンの場合は、フッサー

ルが定式化した「構造的統一体に働く一般法則」を具現化するのにまさにうってつけの例を音素の体系という、具体的に全体を想定できる体系のうちに見出したのであるが、そのことが〈構造〉の発見につながったのである。

ここで注意すべきは、構造は〈変換〉を通して「不変であるもの」として現れるということである。〈幼児が音素体系を獲得していく過程〉と〈失語症の患者が音素体系を喪失していく過程〉は音素体系という同じ構造の二つの〈変異体〉（ヴァリアント）である。〈不変体〉（インヴァリアント）としての構造は〈変換〉を通してのみ現れる。構造が〈変換〉という操作と独立に、固定された実体的なものとして存在しているわけではないのである（反実体論的立場）。

6 レヴィストロースにおける〈構造〉

ヤーコブソンの構造言語学における〈構造〉概念はレヴィストロースの構造人類学の成立にも機縁を与えた。ヤーコブソンが第二次世界大戦中に亡命先のニューヨークでレヴィストロースと出会って、構造言語学の方法を「面授」したことはよく知られている。実際、レヴィストロースの『神話論理』四部作（一九六四―七二）における神話の構造分析では、ヤーコブソンを介して学んだ構造言語学の概念や用語が多用されているのである。

『神話論理』の第一巻『生のもとの火にかけたもの』はブラジルのボロロ社会の神話から始まる。レヴィストロースはボロロの神話のうちM2とM5（『神話論理』では、神話は扱われる順に四部作全体で通し番

号がつけられている）を同一軸上に並べて構造分析を行なっている。神話M2とM5は次のようなもの（いずれも筆者による要約）である

神話M2「水、装身具、葬礼の起源」（ボロロ）

ある日、村の首長のバイトゴゴの妻が森に野生の果実を採りにいこうとしていると、若い息子がついて行きたがった。息子は断られたので、こっそりと跡をつけた。

そして母親が同じ一族の兄弟に犯されるのを見た。息子からそのことを聞いたバイトゴゴは、男を矢で射殺して復讐したあと、夜のあいだに、妻も弓の弦で絞め殺して、その死体をアルマジロに手伝わせて家の床に埋めて隠した。

ところが少年が母親を捜した。少年はバイトゴゴにだまされ、偽りの手がかりを追いかけて、やせ細り、泣き、疲れ果てた。ついにある日、バイトゴゴが第二夫人を連れて散歩していると、少年はもっと上手に母親を捜そうとして、鳥に変身し、バイトゴゴの肩に糞を落とした。糞から芽が生えて大きな木になった。

奇怪な姿を恥じたバイトゴゴは、村を去って低木林で放浪した。彼が休息のために立ち止まるたびに、そこに湖や川ができた。それまで水はまだ地上になかったのである。水が出現するたびに、木は小さくなり、ついにはなくなった。（以下、装身具、葬礼の起源の話は省略）

神話M5「病いの起源」（ボロロ）

病気がまだこの世になかった頃、ある若者が男子小屋に移るのを拒み、母親の小屋に居つづけた。

祖母がこの振る舞いに腹を立て、毎晩、寝ている孫の顔の上にしゃがみオナラをかけた。その毒で衰弱した若者は、ある晩寝たふりをして原因を知り、怒って矢を祖母の尻の穴から突き刺して殺し、死体をアルマジロに手伝わせて床に埋めた。

同じ日、毒を使った漁を行なった女たちは、翌日、毒で死んだ魚を拾い集めるために出かけた。若者の姉は、幼い息子のお守りを祖母に頼もうとしたが、祖母がいないので、子供を木の枝の上に置いていくと、子どもは蟻塚に変身した。

川に着いた姉は、村と川のあいだを往復して魚を運ぶかわりに、魚を貪り食った。彼女の腹はふくれ、彼女が苦痛のために呻き声をあげるたびに、体から病気が飛び散り、村はあらゆる病気に汚染され、死がもたらされた。(以下略)

M2とM5は、一見するとまったく異なっており、アルマジロに手伝わせて死者を家の床に埋めるという共通点を除けば、特に共通点はないように見える。しかしレヴィーストローはそこに逆転による〈変換〉の関係を見出していく。すなわち、M2では、

「昼間／森で／兄弟姉妹という水平関係で／男が能動的で女が受動的に／男の体からの液体（精液）を下の穴（腔）に受け入れる」

というインセストが行なわれるのに対して、M5では、

「夜に／家で／祖母と孫という垂直関係で／女が能動的で男が受動的に／女の体からの気体（オナラ）を上（鼻）から受け入れる」

という、いわば「逆転したインセスト」が行なわれる。つまり、M5の祖母の訳のわからない奇妙な行為は、M2のインセストの論理的な逆転によって作り出されたものだというのである。

レヴィ・ストロースによれば、M2とM5の間には「昼／夜」「森／家」「同世代／隔世代」「男／女」「能動性／受動性」「液体／気体」「下（の穴）／上（の穴）」などの二項対立群の逆転という「変換」を通じた逆対応が見られる。このように一つの神話と他の神話との「変換」の規則が規定されるとき、その二つの神話は同じ構造の「変異体」とされ、そこに構造的同形性があるとされる。ここでも構造の「不変性＝同形性」は「変換」を通してのみ現れるのである。

このことは射影幾何学における射影変換を例にとって説明すると分かりやすいだろう。同じ図形、たとえば正方形でも、射影の断面（少し斜め上から見たときの見え方）は台形であったり菱形であったりする。これは「変異体」とも言える。視点が移動すると、図形は別な形に変化する（射影変換される）が、そのときでも変化しない性質（射影変換に関して不変な性質）、つまり「不変体」を、その図形の一群に共通する「本質」という意味で「構造」と呼ぶ（数学的な「構造」の概念）。今の例で言うと、正方形と台形と菱形は同じ数学的対象（変換群）とみなされ、「四角形」と表される。この場合も「構造」と「変換」は相即的である。また「不変体」としての「四角形」を「こういうものだ」と示すことはできない。そのことは、たとえば「三角形一般」を描いてみよと言われても描けないのと同じである（描かれた単独の三角形は、特定の三角形になってしまう）。数学的な「構造」はあくまでも不可視の、高度に抽象的なものである。

レヴィ・ストロースの構造人類学における「構造」の探究（構造分析）も同じような手順をとる。すなわち、上の例のように神話M2とM5という民俗誌的事実（「変異体」）が言わばさまざまな図形（変換群）

として与えられているときに、最初は与えられていない諸変換を探究していった、〈変換〉によって現れる不変なものとしての〈構造〉に到達するのである。この場合も〈不変体〉としての〈構造〉を、たとえば「ある社会の親族の構造」というように、「こういうものだ」と示すことはできない（レヴィ・ストロースの言う〈構造〉を、そのようなものだと考えるのは、よくある誤解の一つである）。この場合の〈構造〉も、数学的な〈構造〉と同様、あくまでも不可視の、高度に抽象的なものである。

このように〈構造〉とは、数学の中に隠されている秩序である。そしてレヴィ・ストロースは、「未開」社会の一見したところ訳のわからない奇妙な神話の中にも〈構造〉を発見した。つまり「未開」社会の神話を支えている集合的な思考の働きの、西欧近代の数学を支えている思考の働きの同型的であり、どちらにも同じ秩序が隠されているということである。ここから、数学に代表されるような西欧近代の知のシステムと「未開」社会の知のシステムの間に優劣の差はなく、どちらも同じレベルにおいて対等なものとして存在しているという重要な帰結が導かれるのである。

さてレヴィ・ストロースは、〈変換〉という操作を「無意識のレベルでの操作」であると考えている。ここから、人間の思考は主体の意識とは無関係な〈変換〉によって規定されるという考え方が生まれ、「主体の不在」「人間の消滅」「反ヒューマニズム」といったセンセーショナルなスローガンも出てくるわけであるが、レヴィ・ストロースの場合、〈変換〉という操作の「主体」が〈無意識〉であるとか、「無意識が変換する」とか言っているわけではない。レヴィ・ストロースの言う〈無意識〉を、そのようなものとして（つまり「主語」として）実体化して考えるのもまた、よくある誤解の一つである。さらに甚だしい誤解は、レヴィ・ストロースの言う〈無意識〉をフロイト的無意識と解釈して、非合理的な力が人間を支配しているのだと考

えることである（レヴィ＝ストロースが『悲しき熱帯』（一九五五）の中でフロイトを自分の「師」の一人として挙げているので（第二部第六節）、このような誤解が生まれるのであろう。しかしそこでは、フロイトに見られる思考の性向が自分の仕事とも共通しているということが述べられているだけである）。

レヴィ＝ストロースの言う〈無意識〉の概念の直接の源泉は構造言語学の音韻論にある。ヤコブソンは一九四二―四三年にニューヨークの高等学術自由学院で構造言語学の立場からの音韻論の講義を行なったが、この時期、ヤコブソンとレヴィ＝ストロースはお互いの講義を聴き合っていた。後にそのときの講義をまとめたヤコブソンの『音と意味についての六章』（一九七六）が出版されたときに、レヴィ＝ストロースは序文を書いているが、その中で「重要なのは、……それぞれの音素をそれだけで切り離して見たときや、それ自体の本来的な実質としての音声的個性なのではない。ある……体系における音素相互の対立こそ重要なのだ」というヤコブソンの言葉を引用している¹³。

プラハ言語学派の音韻論では、物理音としての「音声」と言語音としての「音素」を明確に区別する。

「音素」は物理的存在としての実質を持たず、ただ音素相互の対立関係（差異）からなる体系の中に位置づけられてはじめて成り立つものである。たとえば「音声」として明らかに異なる物理的特徴を持つ「ミ」と「メ」は、英語の音素の体系においては、「音素」としても異なるものとして区別される（差異化される）。しかし日本語の音素の体系においては、「音素」として区別されない（差異化されない）。このように各言語の音素の体系においては、音素相互の対立関係（差異化する／差異化しない）はそれぞれに異なっている。そのため日本語を母語とする話者が英語で《rice》（米）と言うつもりで《lice》（シラミの複数形）と発音してしまったのである（「私は米を食べるのが好きです」と言ったつもりが、「私はシラミを食べるのが好きです」

と言ったことになってしまおう。この場合、日本語を母語とする話者が「差異化しない」のは、話者の意識的な選択ではない。ここには意識的な選択の作用に先行する作用がある。レヴィ・ストロースはそれを「無意識のレベルでの心的操作」と呼んで、「他のあらゆる社会制度と同様、言語は、無意識のレベルでの心的操作を前提とする」と述べている（ここで言われる「他のあらゆる社会制度」の中には、婚姻および親族を統制する規則も含まれる）⁽¹⁴⁾。

このようにレヴィ・ストロースにおいて「無意識」は、構造言語学の音韻論をモデルとしながら、主体の意識的な作用に先行する作用を特徴づける用語として用いられている。この「主体の意識的な作用に先行する作用」が生起する次元は、超越論的現象学の用語で言えば「受動性」の次元である。周知のように、一九二〇年代に成立したフッサールの「発生的現象学」においては、対象を構成する超越論的自我の能動的な働きに先立つ受動的先構成の次元に光が当てられている。レヴィ・ストロースも「無意識」という名のもとに同じ問題次元を探究していたのだとすれば、レヴィ・ストロースの構造主義が、リクルールの言うような「反現象学的な知性主義」でないことは明らかであろう。

結語

結論を言うならば、現象学と構造主義の間の断絶や対立を強調する見方は、歴史的事実を知ろうとせず、構造主義のイデオロギー的側面にばかりこだわるような態度がもたらした偏見である。歴史的事実を精査し、構造主義の本来の面目である方法論としての側面に着目するならば、ヤーコブソンの構造言語学もレヴィ・

ストロースの構造人類学も、

- (1) 精神的・文化的形成体の〈自律性〉の主張
- (2) 徹底した内在主義
- (3) 〈普遍的なもの〉への希求
- (4) 反自然主義的立場
- (5) 反経験主義的立場
- (6) 反実体論的立場

などの特徴をフッサールの構造現象学から受け継いでいることが分かるのである。レヴィ＝ストロースは、〈構造〉概念がフッサールに由来するものであることをよく知らなかったようであるが、⁽¹⁵⁾これらの点において、フッサールのかかなり忠実な後継者であったと言ってよいであろう。さらにレヴィ＝ストロースの構造人類学は、フッサールの超越論的現象学とも問題次元を共有していたとさえ言えるのである。

注

- (1) サルトル (竹内芳郎訳) 『弁証法的理性批判Ⅰ』(サルトル全集第二六巻、人文書院、一九六二) 一四五頁。
- (2) P. Ricoeur, *Le Conflit des interprétations*, Les Editions du Seuil, 1969, p. 37.
- (3) *Ibid.*
- (4) *Ibid.*
- (5) 市倉宏祐「構造主義はいかにして哲学たりうるか」『理想』一九八二年九月号「構造主義再考」一五頁。
- (6) R. Jakobson, *Form und Sinn, Sprachwissenschaftliche Betrachtungen*, Wlth. Fink Verlag, 1974, p.176.

フッサールにおける構造現象学の展開

(7) R. Jakobson, *Main Trends in the Science of Language*, Harper & Row, 1974, p.14.

(8) マサリクはウィーン大学とライプツィヒ大学で哲学を学び、ウィーン大学講師を経て、一八八二年にプラハに哲学教授としてやってきた。彼はウィーンではブレンターノに師事し、ライプツィヒではフッサールと親交を結んだ。ライプツィヒ大学の学生であった当時（一八七六七八）数学を志していたフッサールに年長のマサリクは哲学の手ほどきをし、ウィーンに行ってブレンターノの講義を聴くように熱心に勧めて、後にフッサールがウィーンにやって来たときにブレンターノに近づく機縁をつくった。また、フッサールが新約聖書の研究をはじめた二七歳の時（一八八六）にプロテスタントに改宗したのも、マサリクの影響によるとのことである。J・エスタライヒャー『崩れゆく壁―キリストを発見した七人のユダヤの哲学者』（稲垣良典訳、春秋社、一九六九）六三頁参照。

(9) Jakobson, *op. cit.*, p.14.

(10) 服部四郎編『ロマン・ヤコブソン選集』第二巻（大修館書店、一九七八）一一六頁。

(11) Jakobson, *op. cit.*, p.13.

(12) E・ホーレンシュタイン（川本茂雄・千葉文夫訳）『ヤコブソン』（白水社、一九八三）一二頁。

(13) ヤコブソン（花輪光訳）『音と意味についての六章』（みすず書房、一九七七）四頁。

(14) 同一〇頁。

(15) このことについては山口昌男が、一九七三年にヤコブソンと対談を行なったときに確かめている。「ニューヨーク時代にヤコブソンとレヴィ・ストロースはたいへん親しく、そして影響があったということはよく知られているが、にもかかわらずレヴィ・ストロースが現象学に関心を抱かなかったのはどういうわけか」という山口の質問にヤコブソンは、「われわれは哲学にかかわるような問題についてあまり語り合わなかった」と答えている（山口昌男編著『二十世紀の知的冒険』岩波書店、一九八〇、三〇頁）。

（のえ しんや・東北工業大学名誉教授）